

2018年1月21日<降誕後 第3主日礼拝>

飯川雅孝牧師

招詞：ヨハネ14：6、8－9、11

聖書：ルカによる福音書7章24－35節

説教： 『永遠の命を与える者』

## 1. キリスト教との出会い

キリスト教とは自分にとってどういう意味を待つか。この礼拝の場ではそれぞれの皆さんにとって、幅広く受け止められています。そして、わたしたちの幼稚園・保育園はキリスト教保育を謳っており、地域の信頼を得ております。将来良き信仰者としての道が開かれればと願う者であります。長年教会生活を続けておりますと、そこにおられる方の理由を聞くことがあります。70歳位のご婦人は若い頃教会に通うようになったが、嫁いだ先でお姑さんの御意見が強く、洗礼を受けたのはその方が亡くなってからだった。それまでもその教会を変わずにいたのは、一緒にいた日本の救世軍を立ち上げた山室軍平の娘さんがとても良いクリスチャンで、人々や教会に尽くす献身的なすがたをみていたので、其の後もここを離れる気になれなかった。とっていました。また、私が大学の研究室で一緒に学んでいた方は、すでに母校の准教授的な役目を担っていましたが、自分は小さい派のキリスト教団体に所属しているので、その団体の中では自由に動くことはできない。自分の考え方と指導者の考え方に行き違いがあり、そこで摩擦があって非常に悩んでいたが、毎朝の祈祷会でおばあさんが自分のために祈ってくれた。だから、自分はその派も教会も離れないで来た。ということでした。人間の集まりには意見の違い、摩擦があるとつくづく感じました。しかし、問題がある中でも自分の生涯を掛けて信ずることができるものがある。暗闇の中で輝き、自分に喜びを与えてくれるものがある。『永遠の命』に導いてくれる方、キリストがおられる。そのことを証しております。そして、その根拠はイエスの国、ユダヤの古代から続く歴史の中にあります。

## 2. イエスの国ユダヤには先祖から歴史的に育まれた信仰の財産がありました。

今日は昨年暮れから学んでおりますルカの福音書が示す『永遠の命』を与える方と、この方にお会いできるためにはわたしたちの心掛けはどうであればよいのかを考え、また実際イエスに会った弟子の告白を聞いてみたいと思います。

昨年のアドヴェントからクリスマスに掛け、主イエスの誕生についてのお話をしました。

- ・神が聖霊による神の子イエスの誕生に、あえて自分の貧しさを認めるおとめマリアを選ばれたのは、ユダヤ人の1000年以上にわたる謙遜な者の信仰を見たということ。
- ・年老いるまでメシアの誕生を待ち望んでいた敬虔なシメオンとアンナに神はその約束に応えて、イスラエルを救い、さらに彼らを越えて全世界を救われる主の誕生の喜びを与えたこと。
- ・バプテスマのヨハネに代表される人々の迷いに対しても、その迷いを除かれ、彼の預言者としての苦闘の生涯の終わりに、神の子のみ業である奇跡によって人々を救われた事実

を伝え、メシアであること証しされたこと。

これらの物語は、人の命を左右されるほど畏れ多い方が愛ゆえに人間を追い求められ、人間の応答を待たれる。応答した者とは人格的和解が成り立ち、『永遠の命』が与えられる、そのことを伝えております。

### 3. 新しい時代の到来と神の「知恵の正しさ」

それは同時にイエスが「我が父」と言っておられるように古代イスラエルの民に歴史的体験に裏付けられた新しい神の国の到来であります。それ以来、わたしたちに2000年の間与えられている神の業であります。ですから、神のこの大きな働きかけに心を向けない傲慢な心には、その救いが及ばないのであります。本日の聖書の箇所は以上のことの意味を繰り返し述べています。

イエスの国ユダヤでは、神はご自身のみ言葉を告げる預言者を民の中に遣わしました。彼らは宮殿で華美なおごった暮らしをする貴族とは違い、聖なる神の力をいただくために人間の持つこの世の欲望を抑制し、自分自身を靈的に訓練しました。日本の修験者や仏教の僧侶、世界の宗教の靈能力者に通ずるところがあります。イエスは、バプテスマのヨハネのことをその中でもメシア到来を告げる役目を担う最大の預言者であると称賛します。ところが、民衆に対して、あなた方は、わたしを信じて聖霊を受け、神の国に受け入れられた。だから、神の国に入っていないヨハネより上である。さらに、この世で罪あるものと烙印を押された取税人でさえ、自己の罪がイエスの十字架により赦され神の国に迎え入れられる。この取税人の喜びはどれほどが大きいことか。

しかし、ファリサイ人、律法学者や大勢のイエスの時代の人はこのように歴史の中で証明している救い主のイエスが来ても何の感激もない。

『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、泣いてくれなかった』と子どもたちが歌っていることのままではないですか。その上、パンも食べずぶどう酒も飲まずにいるヨハネを『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、自分を『大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言って神から遣わされた者を無視している。

しかし、見てみなさい。この二人に従う人は、聖霊と火により洗礼を授かり『永遠の命』を得ていますよ。これこそ「神の知恵」の証拠ではないですか。イエスはそのように語ります。

ヨハネ福音書ではもっと直接的に『永遠の命を与える者』はご自分であるとイエスは語ります。「わたしは道であり、真理であり、永遠の命である。」フィリポはぼんやりとしてこのことに気づかなかつたため叱責されています。また、イエスが自分は命のパンであり、その血を飲むと救われると言った時、多くの弟子が離れ去りました。その時、ペトロは「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」と告白しています。このように言うペトロも他の弟子たちと同じように、

『永遠の命』が本当に分かって、自分自身が変わられて力強く生きたのはイエス死と復活の時の後でありました。

- その後2000年、それを受けとめた究極の信仰者は自分の生き方をもって伝えております。もう7-8年前、ある牧師の就任式に出席した時、教区長の挨拶の言葉が私の聞き耳をそばたてました。「教会とはサロンではない。ローマ時代には帝国の迫害の中にあって初代のキリスト教徒は信仰を守った。」と、招聘した教会員たちの自覚を促しました。その時、わたしはローマ時代の信徒の信仰が脳裏をかすめ襟を正される思いがしました。神学校の時、ラテン語の授業で殉教者たちの裁判記録を学ぶという印象的な機会を持ちました。「**聖なるスキッリウム人の殉教**」という記録があります。ここに、彼らが信じて疑わない『永遠の命を与える者』の臨在を見る思いがしました。時は西暦180年の7月17日、北アフリカのカルタゴで20人のキリスト教徒が捕まって、総督の執務室に引き出されました。

総督がこの者たちに言います。「お前たちは、キリスト教の迷信にうなされている。だから正気になって皇帝を崇拜せよ。そうすれば我らの主なる皇帝の寛大な処置に与ることができるのだぞ。」この日が来ることをすでに覚悟していたリーダー、スペラトゥスが答えます。「私たちは悪事を犯したことはありません。不正な行為に加わったこともありません。呪いの言葉を口にすることもありません。むしろ私たちの真実な神を敬っておりますから、ローマ帝国からひどい取り扱いを受けても、それを神の恵みとして感謝してきました。」「私はこの世の帝国が神の国とは思いません。むしろ私は、**誰も見たことがなく、この肉体の目では見ることのできない神にのみ仕えています**。私は盗みを働いたことはありません。また、何かを買う時には、ローマに税金を納めています。と申しますのも、諸王と諸国民を支配する私の主である神を認めているからです。」この発言は殺されてもよい。ローマ皇帝は神ではないという神への誓いであります。そこで、総督は「お前たちは決心を変えなければ法によって斬首する。しかし、三十日待つてやる。その間に考え直せ。」この言葉に対して、リーダーが再び答えます。「私はキリスト教徒です。」そして、全員が声を合わせて「私たちはキリスト教徒です。」と言います。総督は判決を読み上げます。「スペラトゥス他数名の者はキリスト教徒の習慣に従って生活している旨告白した。彼らは、ローマ人の風習に立ち戻る機会を与えられたにもかかわらず、頑固にその考えを変えなかったため、斬首刑に処す。」彼らは言います。「私たちは神に感謝します。」「今日、私たちは殉教者として天国にいることになるでしょう。」そして直ちに、彼らはキリストの名の故に首をはねられた。

このようにキリスト者たちは『永遠の命』を与えられ、天国に召されたのであります。わたしたちも、真実なキリスト者としての生き方が求められているのです。